

ヨブ記

ヨブ記は奥深く一風変わった書です。

舞台はイスラエルから遠く離れたウズと言う地ですが、詳細は分かりません。

主人公のヨブはイスラエル人ではありません。

著者もいつの時代の話かも不明です。これはおそらく

歴史的な背景などに気を取られずヨブと、彼が受けた試練。

そこから生まれた問に読者を集中させるために意図的に伏せてあるのでしょう。

ヨブ記の構成は明快です。

短いプロローグの物語で始まり

短いエピローグの物語で終わります。

そこに挟まれた中身は難解なヘブル語の詩で

ヨブと友人達と呼ばれる4人の人物との対話です。

この対話に続く神からヨブへの語りかけが、

このセクションの結論となっています。

ではその内容を見ていきましょう。

プロローグはヨブの人物紹介です。

彼は公正で神を恐れ非の打ち所がない人でした。

それから突然場面は変わり、み使いたちが神の前に立っているシーンです。

これは旧約聖書でよく見られ、神が世界を治めておられることを表す描写です。

ここでサタンと呼ばれるものが登場します。

サタンというのはヘブル語で告発者とか検察官という意味です。

ここでのやりとりはまさに法廷劇のようです。

神がヨブを正しい人として紹介すると、告発者は正しい人に

報いると言う神のやり方に文句をつけます。

ヨブが神に従うのは繁栄させてもらっているからだと言うのです。

彼を苦しめて初めてその正しさが本物かどうかかわかると主張したのです。

神が同意したためサタンはヨブを苦しめます。

多くの読者にとってこの箇所は驚きです。

なぜ神は正しい人が苦しむことを許されたのでしょうか。

きっと最後まで読めばわかる、と思うかもしれませんが。

しかしどこまで読んでもこの所はその問いに答えてくれないのです。

プロローグで提示されているこの所の本質的な問いはこれです。

神は正義のお方なのでしょうか。

また本当に正義に基づいて世界を治めておられるのでしょうか。

この書の1番最後で神はそのために応答しますが、

ヨブが、なぜ苦しめられたのかについての答えはありません。

プロローグは苦しみ、途方に暮れ、妻にまで非難されるヨブの姿で終わります。

そんなヨブに知恵を貸そうとする3人の友人が近づきます。

テマン人エリファズ、シュアハ人ビルダデ、ナアマ人ツォファルです。

彼らもヨブと同じようにイスラエル人ではありません。

彼らは古代の中近東の神観と人間の苦しみの原因についての当時の最も優れた思想を披露します。

ここからがヨブ記のメインセクションです。

まずはヨブが口を開きます。友人がそれに答えるとヨブが、また友人に答え、それに対して別の友人が答えるというのがこのセクションのパターンです。

ヨブと3人のやりとりは3回繰り返されます。

彼らの論点は3つに要約されます。神は本当に正義な方なのか、

神は正義によってこの世界を治めておられるのか、

もしそうならヨブが、苦しめられるのはなぜなのかということです。

ヨブと友人たちは世界で起こる全ての出来事において、

神の正義の法則が働いているはずだ、と言う前提のもとに

議論を戦わせました。つまり知恵があり、良い人間で

神を恐れている人には良いことが起こる。

神が報いてくださるから。

しかし、悪に傾き、愚かで罪を犯すなら悪いことが起こるはずです。

神が罰を与えるはずだからから。ヨブが一貫して主張したのは自分は潔白だと言うこと。

だから今苦しみは神の罰ではないと言うことです。

プロローグを読んだ読者はどちらもその通りだと知っています。

神ご自身がヨブは正しく非の打ち所がないと言っていたのですから。

無実を訴えるヨブは神を責めます。

神は正義によってこの世界を治めていない、

もしくは正義のお方ではないと言うのです。

しかし友人たちは同意しません。神は正しい方だと主張します。

つまり神はいつも正義を持って世界を治めておられるので、

責めるべきは神ではなくヨブだと言うわけです。

罰を受けるからにはヨブは何かとても悪いことをしたに違いないと

彼らは考えました。そこでこんな罪を犯したはずだと決めつけさえました。

ヨブはことごとく反論していましたが、やがてうんざりして

彼らに見切りをつけると、直接神に訴え始めました。

ここで注意すべきは、この時のヨブは支離滅裂だったことです。

彼だって神は正義の方と信じていました。
しかし今や自分の悲劇と折り合いをつけることができません。
それで神は意地悪だと感情を爆発させることもします。
この世界における不当な事は全て神のせいだとさえ言いました。
しかし、それを言ったとたん彼は震え上がりました。
なぜなら、神が正義であることを本当は切望していたからです。
そこで最後にもう一度自分の無実を主張すると、
神に向かって自分に直接説明してくれと訴えました。
ここで新たな人物が登場します。
ブズ人エリフです。
彼はイスラエル人では無いのですが、母の名前を持っています。
彼もヨブと3人の友人と同様に神は正しい方で、
正義によってこの世界を治めておられると考えていました。
しかし、人が苦しみを受ける理由については、
他の人たちより深い考えがありました。
それは過去の罪に対する罰ではなく、将来罪を犯さないための警告かもしれない。
あるいは人格を練り上げたり何かを学ばせるためかもしれないと、
エリフはヨブが、苦しみを受けた理由はわからないけれども、
1つ確かな事は彼が神が不正な方だと非難した事は間違っていると言いました。
ヨブはエリフに答えることもなく、対話はそこで終わりました。
古代人の知恵は出尽くしましたが、疑問は解けなかったのです。
その時、突然嵐の中に神が現れヨブに直接語りかけられます。
まず神は不正な方でこの世界を治める能力がないと
言うヨブの訴えに応えるため、ヨブを世界のバーチャルツアーに連れ出し、
それらの秩序や起源についての質問を浴びせ始めます。
神が地球を創造し、星座を造られた時ヨブはそこにいたでしょうか。
ヨブは太陽に上れと命じたり、天気を司ることができるでしょうか。
ヨブには思いもつかない自然界の細々した一切のことに神の目は行き届いているの
です。
神はさらに詳細に語ります。ヤギのすみかや子を産むときの様子、
ライオンやロバが餌を得る方法について。
これはどういう事でしょう。ヨブと友人たちは、
ある公式に沿って神が正義を持って世界を治めていると考えていました。
しかしそれだけではなく、
彼らは自分たちが世界で起こるすべてを把握できるという前提のもと、
神がどのように正義を行使するかについて語れると思っていたのです。

しかし、神が見せた世界の様々な事象は彼らの前提を打ち砕きました。
この世界は広大で複雑な仕組みがあり、
神の目はそれらのすべてに注がれているのです。
ヨブが知っていることなどをほんのわずかに過ぎません。
ヨブは非常に小さな世界観から神は不公平だ、と主張しましたが、
それは神の無限の視点に立たないとわからないことだったのです。
もちろんヨブはそんな非難などできるはずのない存在でした。
この後、神はヨブに自分たちが言っていたようなこと、
つまりすべての罪に、一瞬ごとに正義の原則に従った罰を
与えるような仕事を1日でもいいからやってみたいかと尋ねました。
この世界で正義を実行すると言う事は非常に複雑で
簡単に白黒つけられないのです。
それから神は2つの被造物れについて語り始めます。
ベテモテ(40:15 注、河馬)とレビヤタンです。
これはカバとワニを私的に表現したものと言う説もありますが、
おそらく古代の中近東の神話でよく知られている生き物を指していて、
これらは他の聖書箇所にも登場する神の良き世界に存在する
無秩序と危険の象徴です。
しかし、これらは悪の存在ではなく、神はこの被造物を誇っています。
かと言って安全な生き物でもありません。
つまり神が造られられた世界は素晴らしく良いものですが、
完全ではなくいつも安全とは限らないのです。
この世界は整った美しいものではありませんが、
ときには猛々しく危険なものでもあるのです。
この2つの生き物のように。
ここでもう一度ヨブの苦しみから生まれる疑問を振り返ります。
天災であれ人災であれ、世界にはなぜ苦しみがあるのでしょうか。
神はその問いには答えていません。
神が言われたのは、ただこの世界はとても複雑で、
少なくとも現時点では苦しみを避けられる場所ではないと言うことそれだけでした。
ヨブは神の正義に疑問を呈しました。
それに対し神はヨブにはそんなことを言えるほどの知識はない
と報じられました。ヨブは満足のいく説明を求めましたか
神が求められたのは、ただご自分の知恵とご性質に信頼することでした。
ヨブがそれに謙遜と悔い改めを持って答えました。
神を責めたことを謝罪し、部を超えた事を認めました。

そして突然エピローグで終わります。
まず神はヨブの友人たちは間違っていたといいます。
彼らの正義についての考えはあまりにも単純で、
神の知恵やこの世の複雑さには及びもつきませんでした。
それに対しヨブの神観は正しかったとされます。
しかしヨブは性急に結論を出し、間違えていました。
それでも神はヨブの葛藤を良しとされたのです。
ヨブは自分の感情や苦痛を神の前に正直にさらけ出しぶつかってきました。
それは苦しみの中で祈る姿勢として正しかったと、神は言われたのです。
ヨブは良い行いへの報いとしてではなく、
ただ神からの恵みとして健康、家族、富をもう一度与えられます。
これがこの書の結末なのです。
ヨブ記はなぜ善良な人々に悪いことが起こるのかと言う疑問には答えてくれません。
むしろ苦しみに会うとき、その理由を突き止めようとするより、
神の知恵に信頼するようにと語りかけています。
理由を問い始めるとヨブの友人のように、神を単純化してしまうか、
ヨブのように乏しい知識のまま神を責めてしまうものなのです。
だから自分の苦しみや嘆きを、正直に神様の前に持っていき、
神様が愛を持って取り計らってくださいと信頼しなさいと
勧めています。これがヨブ記です。

500 字要約

ヨブ記は、古代のイスラエルから遠く離れたウズという場所を舞台に、主人公ヨブが受ける試練を描いた書物です。この書は歴史的な背景や著者についての詳細が不明であり、意図的に情報を伏せています。
ヨブ記の構成は明快で、プロローグから始まり、エピローグで終わります。中間には難解なヘブル語の詩と、ヨブと彼の友人たちとの対話が含まれています。ヨブは公正で神を恐れる人として紹介され、彼が受けた試練について疑問が生じます。
ヨブと友人たちは、神の正義の法則が世界を支配しており、良い人が報われ、悪い人が罰せられるという前提の下で議論を繰り広げます。ヨブは自分は潔白だと主張し、苦しみが神の罰ではないと強調します。
友人たちは異なる意見を持ち、神は正義で世界を治めており、ヨブは何か悪いことをしたに違いないと考えます。しかし、この論争は答えを見つけません。

最終的に神が登場し、ヨブに対して自然界の複雑さや神の視点の違いを示し、人間が理解し得ない神の知恵を強調します。神がヨブの苦しみの原因については具体的な答えを提供せず、複雑な世界の中での信仰と神への信頼を促します。

エピローグでは、神がヨブの友人たちが誤っていたと指摘し、ヨブの神観が正しかったと認めます。ヨブは謙虚になり、神に感謝の心を示すと、健康、家族、富が回復します。

ヨブ記は、人が苦難や疑問に直面したときに、神に対して信仰と謙虚さを保つ重要性を強調する書物です。